

学体連会報

発行日 昭和62年1月31日
東京都渋谷区代々木神園町3番1号
国立オリンピック記念青少年総合センター内
財団法人 日本学校体育研究連合会
発行者 会長 大石 三四郎

臨教審「スポーツと教育」分科会

会長

特殊法人 日本体育・学校健康センター理事

学校法人 佐藤栄学園 短期大学創設準備室室長 大 石 三 四 郎



12月18日付の表題の内容が、臨教審の第三次答申のたたき台として、昭和62年1月公表の「審議経過の概要（その四）」に盛り込む分科会案の全容として明らかにされた。

この内容から学校体育に関連したものを解説してみると、まず現状のスポーツ活動の問題点として、学校が受験戦争などで心身のバランスを崩し、その結果、持久力の停滞、精気の欠如、運動能力の欠陥などを生み出している。このような現象は学校だけでなく、社会現象としても顕著に現れ、青・中年層の無気力、持久力の停滞として世人の関心を呼んでいる。

これに対する改革の考え方として、今後障害者を含めて幼児から高齢者まで誰もが生涯にわたり、体力に応じたスポーツ活動ができる「生涯スポーツ」の実現を軸にして、学校体育、一般スポーツ、競技スポーツの振興を図るべきだとしている。そして、その具体策として、一般に開放している民間のスポーツ施設などを対象に税の優遇措置をしたりしてスポーツ活動を刺激し、加えて国際的に高度のトレーニングセンターを併置する国立スポーツ科学研究所を設置し、その他のスポーツ関係の教育機関・団体と共同して全国的な研究ネットワークの形成を図ることとしている。分科会案はまず指導者や、スポーツ施設の不足、また特に最近の競技スポーツの水準の低下をあげ、この対策に学校体育中心のスポーツ活動を検討し、学校と社会との連携を考え、将来の「生涯スポーツ」への芽をはっきりと学校体育の中に埋め込むべきだとしている。

このため分科会は具体的に現存するスポーツ施設

の一般への開放を重視し、①企業のスポーツ施設や休耕地・空地等の運動施設としての開放に対しては税制上の減免措置を講じたり、②学校の施設は社会との共同利用としての効率的使用を検討し、③特に大学などのスポーツの施設の開放を強調、更に進んで大学の演習林のキャンプなどへの利用、または国有林の一般への開放の公示をあげている。

以上の分科会案の提言は国に対しては、①国は、国・地方公共団体が整備すべき施設の基準を策定し②スポーツ指導員の資格認定制度を整備するとしている。さらに、競技スポーツに対しては「競技力の向上は国民の基礎体力とスポーツ活動の充実にある」として、その背景に科学の裏付けを特に必要とし、スポーツ医学・スポーツ科学の研究を推進するため前述のように国立スポーツ科学研究所を設置し、それにともなうスポーツ教育の実践としてナショナルトレーニングセンターを置くとしている。

特に当然とはいいながら気の付いたことは、スポーツという用語を大まかに使用して、従来の体育という用語集団を消すことなく、スポーツ研究をその実践機関の中央において、学校体育をその外郭としてこれに続く体育団体、体育系大学を周辺の協力団体として競技力の向上に結び付けようとしている。

そして次にコーチなど指導者の資格認定制度の整備、スポーツ勲章、功労者顕彰制度の導入をうたい次いで、学校制度の改革にまで及び、体育の六年制中学校の設置を提言しているのは注目すべきだ。

かくして、わが日本学校体育研究連合会の主要たる研究テーマも、この提言を中心としたものを多く取り上げなければならないことになるであろう。

理事長就任に当って

理事長
目白学園女子短期大学教授 浅 田 隆 夫



理事長職は、ここ1年近く空席のため会長兼任で業務が処理されて参りましたが、このたび副会長職の不肖私が理事長の職務を遂行するよう命じられました。顧みれば、私が常務理事として理事会に出席させて頂くようになったのは、確か55年7月からであったと思いますが、当初は第2事業委員会すなわち編集部門を担当させて頂き「現代小学校体育全集全13巻」「親と子のライフ&スポーツ・全12巻」「生徒および教師(小・中・高)のスポーツ断想・全3巻」等を本会の責任編集として、いずれも「ぎょうせい」から公にしました。58年より講習会部門に移り、新たに幼稚園部会を設け、現在小学校部会と並行して共に都小体研・都幼体研との共催で実施し、今日に至っています。

思うに、組織というものは下位集団が絶えず新鮮

で生き生きと機能していることによってその組織が支えられていなければなりません。また、本会の事業についていえば、地区⇄県⇄ブロック⇄国と各レベル内はもちろん、レベル間相互のコミュニケーションが円滑に行われ、またそのための新しい諸事業を遂行すべく check-plan-do-see という角度から在来の諸事業の過程構造を絶えず解析し、その結果を新規事業に生かす努力も必要です。

特に、伝統のある古い組織体は、ともすれば事業がマンネリ化する惧れがありますので、より一層理事会の機能を活性化していきたいと考えています。しかし、これも理事・評議員の諸先生をはじめ、会員の方々の協力・援助なしには到底不可能なことでありますから、この点、何卒よろしく御力添えを頂きますよう、ここにお願する次第です。

学習意欲の向上に役立つ評価

奈良教育大学助教授 高 橋 健 夫



表題のようなテーマをいただきましたが、ここでは、授業過程での「形成的評価」のあり方を、特に最近私が行っている授業研究の事例から考えてみたいと思います。

《適切な学習課題が望ましい評価を生み出す》

子ども達の学習意欲の向上に役立つ評価は、授業の目標や内容から独立して存在するわけではありません。授業での評価というのは、学習目標が実際の学習活動を通してどの程度達成されたかどうかを値ぶみすることですから、肝心の学習目標や学習内容がいかげんなものであれば、何を評価するのかということすら分ったものではありません。したがって、子ども達の学習意欲の向上を図ろうするためには、まずは子ども達にとって価値があり、興味が

あり、しかも具体的にやればできそうな学習課題が系統的に提供される必要があります。また、学習した結果からその課題がどの程度達成できたのかを子ども達自らがはっきり評価できるように工夫されていることが大切です。

《跳び箱の授業研究の事例から》

このことを、ALT-PE 観察法を用いた一つの授業分析の事例から明らかにしてみようことにします。ALT-PEとは、Academic Learning Time in Physical Educationの略で、それが意味することは「授業において生徒個人が体育の学習課題に成功裡に従事した時間量」ということです。このALTの値が高い程、大きな学習成果が期待できると予想されるのであり、一般に、高いALTの値は「よ

い授業」の十分条件であるとはいえないまでも、「よい授業」に共通する必要条件であると考えられています。因みに、これまでの研究の結果から、図1

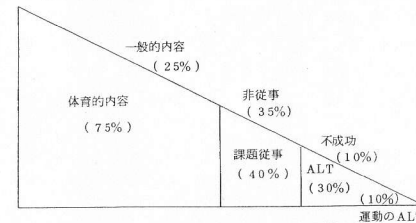


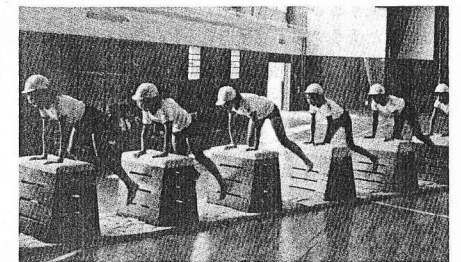
図1. 体育授業のジョウゴ型現象(標準型)

に示したように「体育的内容への配当時間」「生徒の学習課題への従事時間」「成功裡に従事時間(ALT)との間に「ジョウゴ型現象」が生じ、ALTの値は標準30%(50分授業であれば15分)、運動学習のALTは10%(5分)を下回ると報告されています。このことは、体育授業では他教科の授業に比してより周到な計画をもって臨まなければ学習成果を上げることができないことを教えています。

表1. 学習課題の異なる跳び箱運動の授業のALT-PE(小3)

		集団開脚跳びこし	集団横跳びこし	備 考
授 業 全 体 の 場 面	一般的内容	2 0.1	2 4.5	
	待機	0.8	1.6	
	移動	6.5	4.8	
	マネージメント	1 2.6	1 8.0	(用具の出し入れ、移動)
	休憩	0	0	
	学習課題に関係のない指導	0.2	0.1	
	体育的内容	7 9.9	7 5.5	
	個人的技能練習	0	1 5.9	
	集団的技能練習	5 0.6	2 8.9	
	ゲーム	1 3.6	4.5	(発表)
	体操・トレーニング	3.8	8.9	
	知的活動	1 1.9	1 7.3	(先生の説明、話し合い)
児 童 個 々 人 の 行 動	社会的行動	0	0	
	その他の運動活動	0	0	
	学習課題に非従事	3 3.5	3 0.0	
	合間	6.6	8.6	(移動)
	待機	2 5.9	1 3.2	(順番を待つ)
	課題からはずれている	1.0	8.2	(サボタージュ)
	学習課題に従事	4 6.4	4 5.5	
	運動への従事	2 9.8	2 8.0	
	間接的活動	2.2	1.8	
	認知的活動	1 4.4	1 5.7	
	容易に成功(ALT-PE)	4 4.9	3 8.0	
	どちらともいえない	0.3	5.4	
の 困 難 度	大きな困難・失敗	1.2	2.1	
	A ALT-PE	4 4.9	3 8.0	
	L 運動のALT	2 8.3	2 1.0	(体操を含む)
元 度	T 運動課題のALT	2 4.7	1 3.7	(体操を除外)

さて、表1は、N先生が指導した小学校3年生の跳び箱運動の二つの授業を、ALT観察法によって分析した結果です。はじめの授業では、写真に示したように「集団連続開脚跳びこし」が教材として取り扱われました。授業の前半では6人のグループでの連続跳びこしの練習が行われ、後半には、クラス全員の児童が18台の跳び箱の連続跳びこしに挑戦しています。つまり、子ども達は、すでに習得している開脚跳びこしを用いて、集団で、調子を合わせて、しかも連続して跳ぶという、全く新しい課題に挑戦



したわけですが、この課題は子ども達の興味や能力にうまくマッチしていたようです。

次に授業では、同様に集団連続跳びこしが教材にされたのですが、特にその時間では、各グループで新しい跳び方を工夫して集団で跳びこすことが学習課題とされました。したがって、授業の前半は、それぞれのグループで新しい跳び方を工夫するところに焦点がおかれ、後半では、あるグループの創案した「集団連続横跳びこし」が全てのグループの共通課題として学習されております。しかし、新しい跳び方を工夫するということは、3年生の児童には難しかったようであり、また横跳びこしを集団で、調子よく、しかも連続して跳びこすという課題は容易には達成できるものではありませんでした。

これらの授業をALT観察法で見た場合どのようなことが言えるでしょうか。まず、双方の授業とも「体育的内容」に75%以上の時間が配当されており、また、個々の児童に注目した場合には「学習課題に従事」している割合が45%、ALTが約40%であるところから、比較的马ネージメントのいきとどいた授業であったといえます。しかし、問題になること

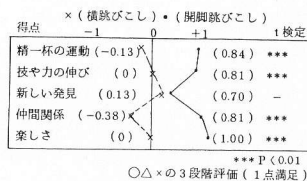


図2 集団開脚跳びこしと集団横跳びこしの授業に対する児童の評価

本校で行っている体育評価

— 指導の過程における学習評価を重視して —

監 事

東京都江東区立亀島小学校校長 三 浦 一 郎



○学習の過程における評価を重視して

学習評価は、学習指導によって児童がどのように変容したかを指導目標に照らして明らかにし、指導計画や指導法の改善に資することをねらいとしている。したがって、単元の終了時、学期末、学年末においてなされる学習の結果に評点をつけることだけでなく、学習の過程においても常に評価し、指導の

は、二時間目の「連続横跳びこし」の授業においてふざけたり、課題とは関係のないことをして遊ぶ児童が多くなり「課題からはずれている」項目の割合が高くなっている(8.2%)ことや、「運動のALT」や「運動課題のALT」の割合が著しく少なくなっていることです。このことは、二時間目の授業では、児童が十分意欲的に学習していなかったことを物語っています。

このような二つの授業の差異は、それぞれの授業時間の終りに実施した「児童による授業評価」の結果からも明らかです。図2に示したように、全ての項目点(1点満点)で、一時間目の「連続開脚跳びこし」の授業の方が高く「新しい発見」を除く4項目については0.1%水準で有意差が認められます。つまり、子ども達からみても、一時間目の授業は「よい授業」であったのであり、二時間目の授業は「あまりよくなかった授業」であるといえます。

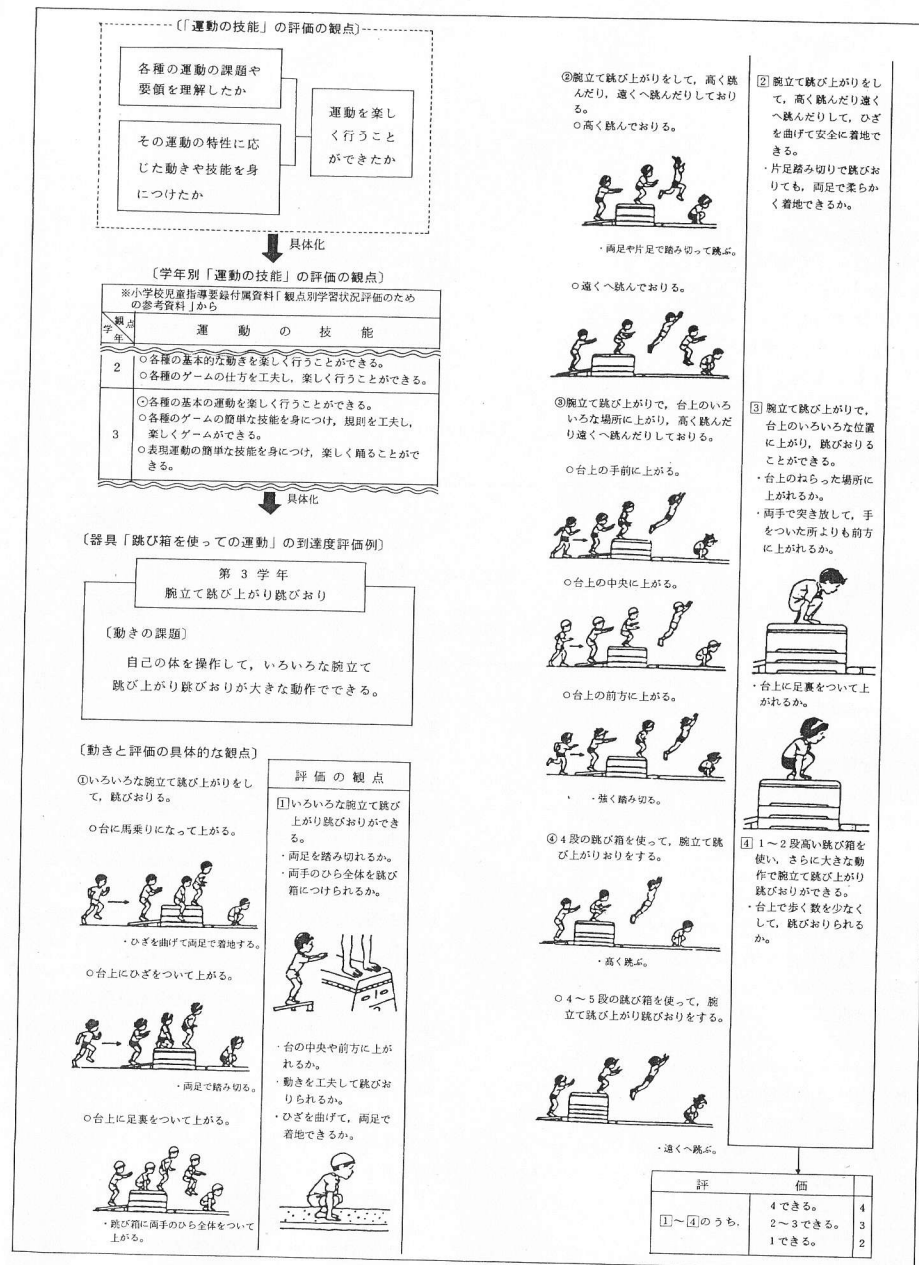
なぜ、そのような差が生じたのでしょうか。一言でそれは、二つの授業の「学習課題」の適否にすぎると考えます。一時間目の「集団連続開脚跳びこし」は、到達すべき目標がきわめて明瞭で、しかも各グループの協力や努力によって確実に目標を達成していくことができ、また、そのことを子ども達自身が自己評価することができ、相互評価することが可能であったといえます。ところが、二時間目の授業の学習課題は、子ども達にとっては抽象的で難しく、また集団連続横跳びこしという課題は、専門的にみても到底達成されるわけはなく、したがって、子ども達はその達成の度合を評価できるわけはなかったのです。

以下次号(第22号)に続く。

改善に努めている。

学習の過程についての評価の役割は、(1)学習行動への取りかかり方、(2)課題についての取り組み方、(3)その結果についての中間的な評価などがある。

したがってまず、学習行動の方向の検討が必要である。方向を失っては学習は進行しないのでそれを確かめることが大切となる。次には、連続的学習行



動についての動機づけを含む評価が重要となる。児童は「よし、よくやった！」などといわれると次の行動が活発になってくる。「それは駄目だ、もっとしっかり」などと言うと構えが変わってくる。根本的に間違っていれば、やり直させることもある。この場合、行為者自身をしてやっぱりそうだと認識させる必要がある。

○評価の観点を明確にして

学習評価は、児童が学習すべき内容をどれだけよく身に付け、目標に対してどれだけ接近しているかを明らかにすることである。そのためには、学習内容を目標との深いかかわりで吟味し、評価の観点を明確にすることが大切である。

従って、評価の観点は指導目標と直接結びつき、学習内容の重点とそのまゝ一致しなければならない。その概略ではあるが、実践例の一部である。

○評価の場面を計画におりこんで (評価の場面)

	児 童 の 評 価	教 師 自 身 の 評 価
導 入	〔導入の段階における評価〕 学習指導の方向を明確にするためのもので、これによって学習指導の具体的なねらいが把握でき、また、このことから、評価の観点をいっそう具体化することに役立てることができる。	○実態の把握 ○指導計画(指導目標の設定、具体化など)の確認
展 開	〔展開の段階における評価〕 学習過程における指導の改善に役立てようとするものである。	○動き・技能の程度(記録、観察、学習カードなど) ○態度(観察、話し合いなど)
整 理	〔整理の段階における評価〕 学習のまとめとしての評価は、学習指導のねらいや内容の重点がよくおさえられたものでなければならない。	○学習成果の確認 ○動き・技能(観察、発表等、質問、学習カード、記録など) ○態度(観察、学習カード、記録など) ○知識・理解(ペーパーテスト、話し合い質問など)

本校で行っている学習評価

サーキットトレーニングの実施とその考察

東京都新宿区立大久保中学校教諭 平 林 健



1. 本校の指導の重点と評価の明確化

本校は昭和55年度から指導の重点目標として、「体力を育てる」を設定し、その具現化を目指して努力している。一人一人の生徒が「自分ができる最高まで」を合い言葉に、指導の工夫・改善を図ってきた。学習評価の観点を次の3点にしばって指導に当たっている。

- (1) 意欲的に運動に参加しているか。
- (2) 仲間と協力して楽しく参加しているか。
- (3) 他の運動との関連を考えて参加しているか。

この場合、特に留意したいことは生徒一人一人の相違点を明確にしていこうという原則を理解し、実行していくことである。

2. サーキットトレーニング-特に持久力について
持久力とは長時間へばることなく、運動(仕事)を続けることのできる力のことである。運動を始めた最初はスピードもあり、技もきれていたものが後半になると動きがぶくなくなりスピードがなくなることがある。これは持久力の不足であり、スピードとの関係は図1のようになろう。

スピードはスプリントの要素の多い種目ほど重要

な要因になり、持久力は長距離の要素の多い種目ほど重要になってくる。これらのことを考慮して、本校では体力の育成を次のように図ってきた。

3. 本校の環境条件と体力づくりとその評価

都内でも新宿の真中にある本校は、歌舞伎町という繁華街を学区に持ち、自然環境からはほど遠い地域にある。しかし学校そのものは、つつじの里と呼ばれた旧前田家の屋敷跡であり、小高い丘の上に建った校舎の玄関まで43の階段があり、又200年近い樹木がうっそうと繁るなど極めて自然に恵まれた環境にある。又東に寺院、西に神社と隣接し、緑と坂道に恵まれるなど、体力づくりに適した環境にある。

このような環境を考慮し、本校では昭和55年から簡単なサーキットトレーニングによる体力づくりを実施している。

(1) サーキットトレーニングのねらい

簡単な運動を組み合わせ繰り返し実施することによって、体力、特に持久力を養い、併せて精神的な

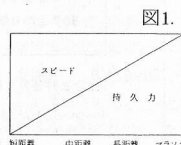


図1.

「ねばり強さ」の養成を図る。

(2) サーキットトレーニングの内容 表1.

サーキットトレーニングの内容		
1. ジョギング	第一グラウンド 3周	約300m
2. 坂道上下	第一グラウンドから中庭の往復	約70m
3. 階段の昇降	43段の往復	
4. ジョギング	第二グラウンド 3周	約200m
5. 腹筋	2人1組で10回	
6. 馬跳び	2人1組で10回	
7. 懸垂	高鉄棒	

(3) 結果の考察

「表2」は男子1500m(全校平均)、女子1000m(全校平均)の年次推移である。「図2」は全国平均と本校との対比である。全国平均には及ばないながらも、向上の様子がみられる。

これらサーキットトレーニングの実施の過程において、全校生徒がそれぞれ自己の体力を意識しながら

より良い評価をめざして

東京都立稲城高等学校教諭 大 倉 健 史



① はじめに

本校は昭和52年、多摩ニュータウンの画稲城市に開設され、27学級より成っている。生徒は、中程度か、ややそれを下回る学力の者が多く、第二志望入学者もあり、意欲に欠けるといわれることもある。しかし、学習、特別活動等を通じて、充実した学校生活実現の推進力となっている者も目立ってきた。これらの生徒を中核として更に意欲ある学習環境の確立の一環としての評価法を探索している。

② 評価について

本校体育科の評価は初年度につくられた「成績内規」にそって現在も行われている。本校の評価は学習の場で自分の能力を伸ばすために、どのくらい努力したかということに主眼を置いている。すなわち力を持った生徒が努力をせず手を抜けば、たとえ力なくとも、欠席がなく努力している生徒と同程度の評価となるように考えている。学期末は10段階、学年末は5段階法により評価、評定している。

③ 評価の方法

本校では各担当者が1単位時間、実技70点、態度30点の合計100点の素点を出し、そこから欠席による減点を行う。その素点を10段階に換算し、各担当者の換算点を合計し最終的な評価を出している。

表2.

	1500m(男)	1000m(女)
昭和55	6分40秒	5分49秒
56	6分41秒	5分45秒
57	6分37秒	5分41秒
58	6分35秒	5分40秒
59	6分34秒	5分37秒
60	6分30秒	5分33秒
61	6分24秒	5分27秒

(指数)

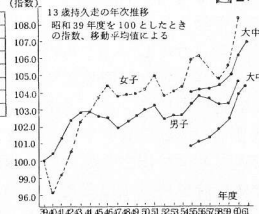


図2.

ら、意欲的に参加していること。二人組の運動などを通して協力しながら楽しく実施していること、又持久走、鉄棒、跳箱などとの関連も考え、積極的に運動に取り組む姿勢が見られることは、喜ばしいことと思う。

④ 評価の内容

① 実技点(1単位あたり70点)

各単元の学習到達度基準を作成し、各単元ごと3~5種目の実技テストを行い、主に、運動技能について評価する。たとえば、水泳は男子クロール50M平泳100M、女子はクロール25M、平泳50M、男女共通で背泳25M、さか飛び込みを到達目標とし、これを3級と定め、特級から5級までの段階で評価を行っている。実技点には知識も含まれ、理論テストを行った時の評価はここに含まれる。

② 態度点(1単位あたり30点)

参加態度・遅刻・服装不備の3点に主眼をおき、自発的習慣形成の努力について評価する。(教務内規では遅刻3回を欠席1時間としている。)

③ 欠席による減点

本校では、欠席に対しては厳しい態度でのぞんでいる。①、②の素点の合計から特に欠席については表Iのように、担当者の実時数に対する欠席時数の割合により減点している。特に、担当者の授業を実時数の1/3以上欠席した場合は、担当者の評価を3以下

表I 欠席による減点

実時数に対する割合	%	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60
欠席による減点	点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	15	17	20	22	25	27	30	32	35

下とするとしている。

④ 各担当者の評価の合算と換算

このようにして出された各担当者の素点を四捨五入し、 $\frac{1}{5}$ して10段階をだす。その10段階を合算し、2単位は20段階、4単位は40段階として評価をだし表Ⅱの換算表により学期評価をだす。単純に単位数で割り平均を出さないのは、単位数が多くなるほど全体に評価が低くなる可能性があるからである。

表Ⅱ 単位数別学期評価(10段階)換算表

評 価	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
2単位	20～18	17	16	15～14	13～12	11～9	8～7	6	5～4	3～1
3単位	30～26	25～24	23～22	21～20	19～17	16～14	13～10	9～8	7～6	5～1
4単位	40～36	35～33	32～29	28～26	25～22	21～18	17～13	12～10	9～8	7～1
分布目安	5～8%		15～30%		60%以内		5～8%			

⑤ 見学者の評価

見学者には見学レポートの提出を義務づけ、見学レポートの内容を評価し実技にかわる評価をしている。見学1時間は実技より2点の減点をし、全授業見学者については、学期毎レポートを評価し実技点の0～40%を与えている。

⑤ おわりに

動くことが嫌いな生徒が多くなった。運動ができないと思込んでいる生徒もいる。評価することによって、どのくらい運動に対する意欲を持たせられるか。そして、黙々と努力している生徒をいかに評価するか。考えなければならないことはまだ多い。

——地方だより——

福島県学体連の現状と課題

福島県学校体育研究連合会会長
福島大学教育学部教授

鈴木 勝 衛



本県の学校体育研究連合会は、小学校教育研究会体育部、中学校教育研究会保健体育部会、高等学校教育研究会体育部会およびその他の学校体育研究団体をもって組織され、幼稚園から中・高・大学までのまさに連合組織体である。さらに効率的な事業推進のため、表彰、編集、研究調査の各専門委員会において運営にあたって実績をあげている。

活動状況 主な事業としては、毎年8月初旬に学校体育、保健・安全、給食研究大会を2日間に亘り合同で開催しており、本年度で第10回を迎えるに至った。この研究大会では開会式に学校体育優良校、学校体育功労者の表彰、幼稚園、小学校、中・高校の各分科会ごとに研究発表や研究協議を開催している。また県内各地区交互に講演会を開き、指導者としての研鑽につとめている。とくに研究調査委

員会では、小、中、高、大学と一貫した体育指導という発想に立って共通の問題や各部会ごとの課題について、毎年調査や研究結果を機関誌に報告し、現場の指導に活用できる資料を提供している。本年度は最近の児童・生徒達の体育の学習にまつわる学習意欲の実態と問題点などに焦点をおいて調査を企画しており、結果を県内だけでなくとどまらず他の機関にも公表し叱正をいただきたいと意欲的にとりくんでいるところである。

今後の課題 各教研部会夫々の行事、あまっさえ中体連、高体連の行事が錯綜しまさに過密ダイヤの様相を呈し、行事開催の日程調整上の課題、さらに研究大会や協議内容の吟味、即ち体育指導上の悩みや不安解決に役立つような内容の追求などについて現在模索を続けているところである。

「勝負の秘訣」

静岡県学校体育研究連合会会長

富士市立吉原商業高等学校校長 渥 美 辰 雄



退職も近づいたこの8月、身辺整理をしていたら学生時代のノートを発見した。

昭和20年と書いてある……昨晩から舞い出した雪が、朝になっても降り続けている。襟口から入

た雪が稽古衣を濡らして冷たい。

その時、道場に白髪瘦軀、小柄な老人が入ってきた。上級生がインパネスの雪を払いながら恭しく最敬礼をしている。後で判った事だがそれが三船久蔵師範であった。

稽古が終わったあと、人を射疎めるような鋭い眼光に静かな口調で次のような話をされた。

「勝負の秘訣は二つある。その一つはスピードである。これは弛まざる訓練によって可能だ。今1つは、相手の前に立たされることなく、相手を自分の前に立たせることである。」と……

四十年経った現在、このノートの言葉に私は光り輝く哲理を発見した思いがするのである。「スピードの養成は訓練で可能だ」と言っているから「物事

に成功する秘訣の第一は他人より余分に汗をかき、人より真剣な努力を積み上げる以外にない」と言うことになる。

「自分の前に立たせる」とは柔道に限って言えば「くずし」と「体さばき」によって自分の優位を確保し相手を自分の勢力下に置くことであろう。

立つ、と立たされるの違いは物理的な面よりもメンタルな面で如何に大きな違いがあるか明白であると思う。ましてスポーツだけの狭い範囲に留まらず人生に勝利する秘訣はただ1つ「やらされる」のではなく、自から参画して「やる」事であり、受動と能動の違いであることを教えて下さったものと思う。

生徒たちはこの「勝負の秘訣」を今日も訴えているのである。

第25回全国学校体育研究大会 兵庫大会を終えて

兵庫大会実行委員会 会長
兵庫県立川西北陵高等学校校長 岩 地 昭



「万山錦秋の候、六甲の山脈にも秋の深まりを感じさせます本日、文部省をはじめとして多数のご来賓のご出席を賜り、また、全国各地から大勢の学校体育関係の先生方を本県にお迎えしてここに『第25回全国学校体育研究会兵庫大会』を開催することができまことは誠に喜びに耐えません。

私が昨年鹿児島大会におきまして、次期開催県の代表としてごあいさつ申し上げてから丁度一年、この間、全国学校体育連合会本部の皆様をはじめ、県・市教育委員会や各関係機関のご指導ご支援と全県あげての体育関係の先生方のご尽力によりまして、本日より及び明日にわたりまして大会が開催されることになり、感無量のものがございます。

本県は、嘉納治五郎先生とともに、我が国体育の育ての親ともいわれます大谷武一先生の生涯の地でもあります。先生は数多くの著書や論文、随想を残しておられますが、『初めて体育指導者になる人々におくる』という随想文の中で、基本的心得の12ヶ条の中に

一つ、自己の指導力をつけるためには、一般教養専門知識、技術を高めるための精神を怠らないこと。

一つ、体育に関係をもつ会には、進んで会員となり、努めてその会合に顔を出すこと。

一つ、体育の指導がやり甲斐のある仕事であるこ

とを確信し、如何なる場合にもこの信念を弱めたり失ったりはしないこと。等々述べておられますが、このことは私達にとっても貴い警句であると思います。

さて、現今の我が国の教育界の現状を見わたしますとき、私達教師の責務の重大さを痛切に感じます。今こそ21世紀に向けて生徒の個性を重視し、その伸長を図るためにも私達自らが資質の向上に努め今一度教育活動を見つめ直すことが大切であろうと思います。

本大会では『学習効果をより高める体育指導はいかにあるべきか』を主題として、生涯体育・生涯スポーツを目指した体育学習の現状をふまえて研究協議し、指導者の資質の向上をはかるのが目的であります。各地、各学校で日夜精進されておられます先生方が一堂に会し、研鑽されますことは極めて意義深いものがあります。

どうかこれを契機に明日への学校体育推進のため新たな意欲と決意をもって、活力ある学校づくりに取り組まれますことを期待申し上げ、本大会が盛會裡に終了しますことを祈念いたします。

最後になりましたが、昭和63年度全国高等学校総合体育大会が本県を中心に近畿地区で開催されます。その節には大勢の体育の先生方が再びご来県くださ

いますことをお願い申し上げ開会のことばといたします。」

晴天に恵まれた11月20日21日の両日にわたり、神戸市を中心に約2,800名の多きに及ぶ会員の参加を得て、7市17分科室16会場で繰り広げられた本大会も盛会裡に終ることができ誠によろこばしい。

11月20日は神戸市文化ホールにおける表彰式を含む開会式、昼食後に小学生による祝太鼓、小中高校生のダンスによるアトラクション。そして、引き続き「一人ひとりを伸ばす体育はいかにあるべきか」の演題による横浜国立大学教授梅本二郎先生の講演があり、華やかでしかも内容の充実した幕開けとなった。

第25回全国学校体育研究大会 分科会報告

〈会長 大石 三四郎〉

第17分科会神戸市立青陽高等養護学校校長 由井優
研究主題 やる気をおこさせる体育学習

朝のサーキットトレーニングを視察した。これは生徒たちが楽しく積極的に参加することによって、自然に人間関係の理解を深め、基礎的運動能力を高め、たくましくねばり強い体力を養うのによい。

第2分科会神戸市立竜が台小学校校長 関田不二男

研究主題 集団の中で個人が育つ指導を求めて
低学年では「力を合わせて楽しめる集団」中学年

〈副会長 鈴木正三〉

第1分科会明石市立大久保幼稚園

第5分科会明石市立和坂小学校

第12分科会神戸大学教育学部附属明石中学校

第16分科会県立明石城西高等学校



私は浅田理事長と共に昭和61年11月21日 広田昇三指導主事の案内で、明石市立大久保幼稚園（園長松下みさ）同市立和坂小学校（校長篠崎清）神戸大学教育学部附属明石中学校（校長関田不二男）県立明石城西高等学校（校長岸本進）の4校、第1.5.12.16分科会会場を訪問した。快晴に恵まれた各会場は予定参加者数に倍する参観者の下で盛会裡に運営進行されていたこと、そしてこのことは流石に教育界

翌21日は、各分科会場での公開授業、研究発表、研究協議等が活発かつ熱心に展開され、参加各位が多くの成果を収められたことと思う。これらの研究会における会員各位の熱情あふれる取り組みを見て常日頃から生徒一人ひとりを大切に愛情あふれる厳しい教育活動を続けておられることを痛感し、感動を覚えた。会員各位はおそらく体育分野のみならずあらゆる分野で日夜ご活躍のことと拝察し、意を強くした次第である。

最後に連絡はるばる参加されました会員各位並びに当研究大会運営にご尽力いただいた関係各位に感謝とお礼を申しあげるとともに、ますますのご精進、ご発展を祈念して報告にかえる次第である。

では「かわり合い深め合える集団」高学年では、「認め合い喜び合える集団」を目標に研究を進めた。確かに集団の子どもたちは生き生きしていた。

第8分科会神戸市立港島中学校校長 奥野 廣

研究主題 集団の中で個が生きる授業とその評価を考へる。

与えてやらせる授業から仲間と協力して生徒一人ひとりが能力に合った課題を見つけ、解決していくようにした。かくして現在から将来にかけて楽しむように運動の生活化をめざす生徒が期待される。

と言われるだけあって、教育のレベルの高さを示す証とうけとめることができ大変嬉しく思いました。時間の関係で各分科会会場とも十分に参観できなかったが、以下若干感想を述べたいと思います。先ず第12分科会場明石中学校では研究課題である「サッカーの公開授業の時間帯でなく「ダンス」の授業を拝見することになった。ここでは良く整備された教育環境と、自信あふれる授業振りに接することができました。次は第5分科会場和坂小学校で「伸びる喜びを味う陸上運動の学習指導を求めて」と題する走高跳の授業を参観した。ここでは「うちの子供は優しく、おとなしい」という校長の言葉とともに、発達段階に応ずる指導が印象に残った。第3番目は第1分科会会場の大久保幼稚園であった。ここでは指

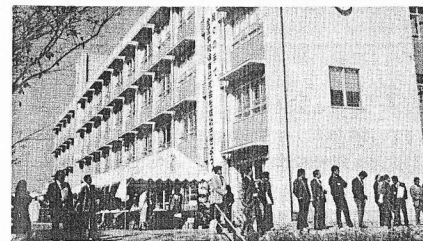
導助言者の須藤鶴子武庫川女子大学教授から見て戴きたかった授業が終って残念ですとの恨言で迎えられたが、園児一人一人が楽しそうに、その動作も大きく、恥じらいのない元気一杯に表現する姿を拝見することができて嬉しかった。最後は午後になったが、第16分科会会場明石城西高等学校を訪問「個人的スポーツの特性を生かしたカリキュラムを求めて」を主題とする「テニス」の指導計画を含めた研究発

〈事務局長 重田 一〉

第11分科会姫路市立増位中学校校長 山本和男

第6分科会加古川市立陵北小学校校長 大野忠治

できたばかりかと思われる姫路市立増位中学校の清潔な校舎の前にテントが張られ、受け付けのお母さん方が、緊張と誇らしげな様子を浮かべながら並んでいる。雰囲気の良い学校だなという印象を受ける。山本和男校長は、体育を学校教育の中心に据えて指導しているといわれ、指導助言の広島大学の団琢磨教授には、指導を受ける立場として、広島まで挨拶に伺ったとのこと、敬服した。校長先生のこういう姿勢を反映しているのであろう。サッカーコー



姫路市立増位中学校

〈副会長 長野野泰〉

第13・14分科会兵庫県立夢野台高等学校校長 小島正男

天候に恵れた全国学校体育研究発表大会第2日目、最初に夢野台高校を訪問した。校門、校舎に入ると学校創立60年余の伝統をもつ校風の重みを肌と感じた。長野副会長 小島校長は、以前県教委の体育保健課長を務めた人であり、現県高体連会長をされている体育マン。校長の案内で、研究授業を見学したが、生徒達は伸び伸びとそれぞれが学習目標をもって授業にのぞんでいる様子が伺えた。あとで、学校の「保健体育科40年の歩み」なる冊子（138頁）をいただいたが、いっそうその感を深くして学校を後にした。



天候に恵れた全国学校体育研究発表大会第2日目、最初に夢野台高校を訪問した。校門、校舎に入ると学校創立60年余の伝統をもつ校風の重みを肌と感じた。長野副会長 小島校長は、以前県教委の体育保健課長を務めた人であり、現県高体連会長をされている体育マン。校長の案内で、研究授業を見学したが、生徒達は伸び伸びとそれぞれが学習目標をもって授業にのぞんでいる様子が伺えた。あとで、学校の「保健体育科40年の歩み」なる冊子（138頁）をいただいたが、いっそうその感を深くして学校を後にした。

表を聴し、次のような感想を持った。倫理的、道德的基準における指導も、実技の指導と同じように綿密に計画され、実践されなければならないと、即ち人間教育の難かしさを感じられた。

またここでは学体連としての謝辞を述べる機会が与えられたことを報告して、私の分科会巡りを終ります。

ト4面を使って休みなく動いている生徒達は、皆坊主頭で一糸懸念。誠にすがすがしい。空気は澄み空には雲ひとつない。東北地方から参加の先生がここはこんなにいい天気なのですかと聞いたという話が伝わる。永年努力してきたことに天が感応したのであろうか。

加古川市立陵北小学校には午後の研究協議のはじめ、大野忠治校長の挨拶の時に伺う。「できる喜びを味わう器械運動の段階指導を求めて」の研究主題。参加者の間に器械運動ができるスペースが用意され、しっかりした姿勢のこども達が待機している姿が非常に印象的であった。



加古川市立陵北小学校

第7分科会神戸大学附属住吉小学校校長 岩田 敦

六甲の山並みのふもとといっていよいよ、市街地を見下ろす高台に学校がある。高学年の児童は、通学ではバスを利用させないで、坂道を徒歩で登校させているとか、現代子の生活環境の改善に取り組んでいるという岩田校長。学校長（神戸大学教授・体育学）の案内で研究授業3クラスをみたが「一人一人が意欲的に動きづくりに取り組む指導を求めて」の研究テーマの通り、児童の学習意欲は仲々活発で、十分成果があがっている印象を受けた。

第15分科会兵庫県立宝塚西高等学校校長 森田康正

関西の名門、宝塚GC、西宮CCを見下ろせる高台にある本校は、創立10年目とのこと。学校を訪れ

たときには、体育館で200余名が出席しての研究発表が始っていた。発表を伺って、体育科教員は勿論学校長以下全教職員の共通理解のもとに体育研究が

〈常務理事 福島良久〉

第3分科会尼崎市立園田小学校校長 竹中 宏



本校の研究主題は「自ら楽しんで体育に取り組む子どもをめざして」-豊かな動きを身につける指導を求めて-であった。この主題解明のために、2年間に13福島常務理事 回の全校研究授業を行ってきた。当日は好天に恵まれ、参加者500名非常に盛会であった。公開授業は各学年1学級ずつで、特に低学年の業前体育(棒・輪などを使って)、高学年の業前体育(ボールを使って)の全校的取り組みに感銘した。

第4分科会伊丹市立南小学校校長 長谷川 清

本校の研究主題は「めあてをもって、意欲的にゲームに取り組む指導を求めて」であった。訪問した時刻は、研究発表が終わり研究協議がはじまろうとするとところであった。研究協議会に残っていた参加者は280名位であった。

校庭がきちんと整備され、各種の自作の遊具が数

進められてきたところを強く認識した。研究協議も終始熱心に行われた。

多く整備されていたことに驚き、非常に感動した。

第9分科会

尼崎市立常陽中学校校長 藤本 洋男

本校は昭和57年4月に開校され、開校以来教育目標の一つに「丈夫なからだづくりに励む」生徒の育成を目指している学校である。研究主題は「生徒個々の実態をふまえた指導と評価の一体化を求めて」である。校庭もきちんと整備され、清潔であった。

訪問したときは、ちょうど2年男子の陸上競技の授業が開始され、主体的な学習が展開された。200名位の参加者が熱心に参観していた。

第10分科会 西宮市立深津中学校校長 土居克己

中学校部会研究主題として「意欲的な学習をめざす、個人と集団のかかわりをふまえた評価について考える」である。本校の教育実践は、体力づくりを基本とし自分を生かし、他を生かす教育を重点としている。訪問はちょうど格技(柔道)の授業が終わり、研究発表を行う時で100名位の参加者がいた。

日本スポーツ教育学会大会

学体連・常務理事

筑波大学教授

江 田 昌 祐

わたり、発表演題数は計63題に及んだ。

参加数も、研究者はもとより学校体育、社会体育をはじめ企業体やスポーツ団体関係者等多彩であり、約300名の盛会で各会場とも活発な討論がなされた。

シンポジウムは「これからの授業研究の課題」を主題とし、理念論の立場、教科教育学研究の立場、態度評価研究の立場、技能評価研究の立場、教育現場と学会をつなぐ立場等からの議論で示唆に富む討論がなされた。

以上が日本スポーツ教育学会大会の概要報告であるが、スポーツの実践研究のみならず、現在・将来の人間社会に大きな教示を与えたことは確かであった。学校体育の立場からみても、甚大な貢献を得たことはいうまでもない。



日本スポーツ教育学会第6回大会は、昨年11月22日に大阪「なにわ会館」で開催された。特に今学会大会は実践的研究に重点をおき、第25回全国学校体育研究大会兵庫大会が行われた翌日に、隣接の大阪の地で開催されたものである。

この学会は、スポーツに関する専門科学と教育実践をつなぎ、社会的・文化的現象としてのスポーツを主体的に享受している人間を育成するための研究を発表し、話し合う学会である。全国で会員数470名を擁し、日本学術会議(学・協)研究団体所属第1部(教育学領域)として発展をみている。会長は本会(日本学体連)会長大石三四郎氏である。

発表領域は、①スポーツ教育学 ②学校スポーツ教育 ③社会スポーツ教育 ④競技スポーツ教育 ⑤身体障害者スポーツ教育 ⑥その他 の諸領域に

第14回関東地区高等学校保健体育研究大会における講演要旨

現代社会における体育の役割

講師 千葉大学教授 豊田 博

文責 茨城県立水戸第一高等学校教諭 吉野貞彦



吉野氏

講師紹介 茨城県高等学校教育研究会体育部副部長

小田部光明

先生は昭和8年山口県に生まれ昭和32年日体大卒日体大助手、東京大学教養部助手・講師・助教授を経て昭和57年より千葉大学教養部教授現在に至る。

昭和36年より東京オリンピック大会バレーボール競技の強化コーチとして主として全日本男子チームの体力づくりに従事、以後男子バレーチームの躍進の基礎を作った。バレーボールの科学的研究は東欧諸国からも高く評価され、豊田方式トレーニングとして世界各国から引っぱりだこである。マツハレシープ・フライングレシープの生みの親でもある。現在国際バレーボール連盟技術委員長、日本バレーボール協会常務理事、科学研究委員長として国際的な指導者と教材の作製に外国をとびまわり、世界のバレーボール関係者に多くの友人を持っている。著書に国際バレーボール連盟の公式教材「コーチズマニュアル」他「バレーボールのコーチング」「バレーボールのトレーニング」「バレーボール教室」等約30冊の関連図書の他多くの映画VTRを監修している。研究分野はスポーツ生理学、バイオメカニクスを基礎とした体育測定学、体育方法学で「スポーツ時の胸腔内圧上昇の循環系への影響」「スポーツに使用されるボールの品質・機能に関する研究」他20篇を越す研究論文をご発表されております。

講演要旨

スポーツ活動や体力づくりが多くの人の関心を集めるようになったことは、我々体育人にとって誠に喜ばしいことである。しかし高度経済成長にもかかわらず見えはじめ、円高不況・世界経済からの孤立化等種々の経済的社会的不安が現実化しつつある中で、依然として安楽と飽食の夢を追い続けている日本の将来を左右する教育の中で、今後の体育は何を目指すべきか、体育人の果たすべき役割について考えてみたい。

27年前に東京大学で初めて教鞭をとったときに驚いたことが沢山ありますが、50人中5〜6人の学生がソフトボールでどうしてもバットがボールに当ら

ない、飛んで来たボールは必ずそらす、打ってもサードに走る、するとサードに投げたという授業どころの騒ぎでなかったという大変な経験がある。又水泳の授業の学生の胸はあばら骨がむき出しであったり、結核の学生、心臓の悪い学生、腎臓の悪い学生、それぞれの学生を集めて医師一人体育教師一人が専任で指導する特殊授業、運動能力低位者グループ指導等。ところが現在では学内球技大会に、野球だけで150チームも集まってくる。どうやって限られたグラウンドでこなすかが問題になる程である。東大生は技術の指導の理論的な裏付けさえ与えてやれば自分で考え自分達で物事をどんどん進めて行く能力をもっている。90分週1回15週間の授業で非常に上達度が速い。下手なバレーボール選手よりもよほど素晴らしいものがある。それに対して千葉大学の学生はレベルの高い学部もあるが逆の学部もあり学生の性格とか、ものの考え方の違いが非常に多様化している。学生の能力に応じてその指導の方法、説明のしかた授業の内容というものを全部変えていかなければいけない。一つのものごとに取り組んで一生懸命努力する習慣を如何に教えていくか、ただ技術の切り売りだけでは我々の使命は十分に果たされていない。与えられた課題解決のため如何に真剣に努力をしていくか、その努力の尊さと集中力を教



昭和61年度 第14回 関東地区高



講演中の豊田 博 講師

えることが教育の基本ではないだろうか。

最近体力づくりが流行になって、ジョギングやエアロビックダンスの教室が大繁盛で多くの人々がスポーツに汗を流す、非常に結構なことである。しかし一方ではコマーシャルリズムに害されながらわけのわからない運動をやって障害をおこし、社会問題にもなる現状である。我々体育指導者自らが現代の社会で、体育というものの持つ役割とか意義をしっかりとつかんで、生徒や学生に充分理解させるように教えるなければならない。一時の流行に終ってはならない。若い人の体力を如何に若い時代に高め、その高めた体力を中年以降になっていかに長持ちさせるか、体力の維持向上が大切である。

世界的な傾向として運動不足病といわれる糖尿病、高血圧症・心臓病・脳血管障害が非常に勢いで増えている。余暇時間の善用、適度な運動の生活化が重要な意義をもっている。体力づくりは以前から世界の全ての国の共通の関心事である。国防力を高め軍事力強化のための体育育成の時代もあったが、今では国民一人一人が自分の幸せな健康な生活力を増し、恵まれた自由な社会の中で充分幸せに生きて行くための基幹としての体力づくりへと転換している。世界の多くの国々がスポーツを通して青少年の育成をはかる組織を強めている。スポーツが今程社会の中で必要な時代はないと言える。

学校体育衣料における「安全性の追求」

明石被服興業株式会社取締役社長 河 合 正 照



当社では、かねてから学校体育衣料に要求されるいくつかの要因の中で、特に5つの要因（運動機能性、生理的快適性、耐久性、健康・安全・衛生・経済性）を、とりあげ重要課題として研究を進めております。

これら各要因の中でも特に耐久性や安全性などは過酷な使用環境下で、着用される学生体育衣料に於ては、ベーシックな基本性能として要求されております。

当社では、学生体育衣料として、新しく安全性を追求した新素材「スタープラス®」を開発、展開を始めました。

東京オリンピックで東洋の魔女という素晴らしいチームを大松さんがおつくりになって、これが日本のバレーボールのブームを招来する大きなきっかけになった。その後、科学的な新しいトレーニングをつんで男子チームも幸いにミュンヘンオリンピックでは金メダルを獲得することができた。ところが、日本の得意のレシーブは全部外国に盗まれてしまった。新しい外国以上の技術を開発しなければいけない。依然として足を使ってひっくり返って回転レシーブ万能時代なんて言っていると、日本のバレーは時代遅れになってしまう。今の中学生から日本のバレー界をたて直さなければならない程の危機を迎えている。新しい科学的な知見を導入して短時間で最も能率の上がる指導など、バレーボールの練習の仕方を根本的に考え直す必要がある。

ジャパンカップで12点制を採用した。試合が長過ぎて選手の健康管理上の問題がきっかけです。

又小学生のバレーボールでのバックセンター固定制は、背の低い児童でも試合に参加できる教育的配慮である。既成の概念にとらわれない創造性のある体育授業をして、日本の若者達を我々の次の世代を背負うにたる充分な人材に育てて頂きたい。高校の体育スポーツが日本の為に必要な役割を果たすことを祈念いたします。

従来のトレーニングウェア（合成繊維）は、体育館に於けるスライディング時などに、瞬間摩擦熱による熱溶解によって穴あきや火傷を生じるとの指摘がありました。

「スタープラス®」は瞬間摩擦熱溶解に対して、優れた効果をもつ「耐摩擦熱溶解加工」を施したトレーニングウェア用素材で、優れた吸汗性など生理的快適性能をも合わせもつ新しい機能商品です。

さらに当社では「スタープラス®」を使って、時代の多様化に伴うさまざまなスクールスポーツのステージやSIを考慮し、洗練されたデザインディテールによって、機能性＋ファッション性をバラン

スよくマッチングさせた、全く新しい感覚のトレーニングウェア“YACHT-2”を同時に提案し、心理的な快適性をも満たそうと考えています。

今後共当社学生体育衣料は、各種の課題に対し総合的に、取り組んでまいれる所存であります。

事務局だより

事務局長 重田 一

1. 昭和61年度62年度役員が次のように決定した。

会 長 大石 三四郎 学校法人 佐藤栄学園

短期大学創設準備室長（学長予定）

副会長 鈴木 正三 埼玉県北本市教育委員

同 坂井田逸治 前専修大学附属高等学校校長

同 長野 元泰 大阪府立東淀川高等学校校長

理事長 浅田 隆夫 目白学園女子短期大学教授

常務理事 江田昌佑 筑波大学教授

“ 遠藤 秀夫 新宿区立大久保中学校校長

“ 長田 一臣 日本体育大学教授

“ 齋藤 昭二 東京都立砂川高等学校校長

“ 福島 良久 目黒区立中目黒小学校校長

“ 松原 要子 新宿区立東戸山幼稚園園長

理 事 鈴木 豊 北海道学校給食センター理事長

“ 洞口 六夫 宮城教育大学教授

“ 桜井 和男 桐生市立商業高等学校校長

“ 清水 善之 新宿区立戸塚第一中学校校長

“ 佐野 和夫 東京都立五日市高等学校校長

“ 三村 茂樹 横浜市立綱島東小学校校長

“ 貝谷 東吾 新潟市立東山の下小学校校長

“ 山本 八郎 愛知県立瀬戸窯業高等学校校長

“ 竹内 良昭 京都市立宇多野小学校校長

“ 田仲 康夫 高石市立取石小学校校長

“ 岩地 昭 兵庫県立川西北陵高等学校校長

“ 藤井 憲司 奈良市立西大寺北小学校校長

“ 渡辺 利彦 山口県教育庁保健体育課課長

“ 前田 幹夫 高知大学教育学部教授

“ 今村 幸光 福岡市立原北小学校校長

“ 荒木 時弥 熊本県立大津高等学校校長

“ 高山 義孝 宮崎県立宮崎南高等学校校長

監 事 練馬区立開進第三中学校校長

“ 浜口 義春 東京都立北高等学校校長

“ 金森 久 江東区立亀島小学校校長

“ 三浦 一郎

	耐摩擦溶解性(秒)	吸水性(秒)
※ スタープラス	40～50秒	2秒内
普通品	3～5秒	30秒以上

2. 表 彰

昭和61年度全国保健体育優良校132校、功労者152名は、兵庫大会開会式において表彰された。61年11月20日である。

また、同時に、財団法人ユーハイム体育・スポーツ振興会が、多年、兵庫県における体育・スポーツに貢献したことにより、特別表彰を受けた。今後、このような受賞者が増加することを願っている。



表彰状を受ける河本理事長

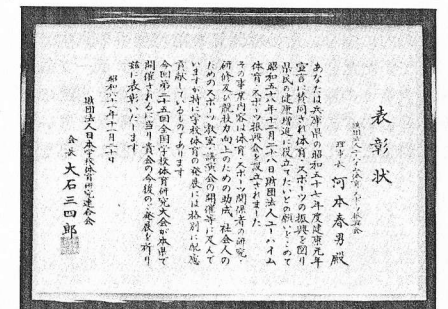


表 彰 状

3. 苗場高原合宿旅館を御紹介致します。

1泊2食つき 3,800円～4,500円
(人数によりご相談に応じます。)

つくし旅館 0257-89-2052
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①24名 ②和室9畳1室 6畳3室 5畳2室
③大広間 洋室20畳1室 ④テニスコート全天候
2面 グランド(共同)2面

ロジアルベン 0257-89-2416
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①30名 ②和室8畳1室 6畳8室 4畳1室
③大広間 洋室20畳1室 ④テニスコート全天候
2面 グランド(共同)2面

ロッヂパンフ 0257-89-3215
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①35名 ②和室8畳1室 6畳9室
③大広間 洋室20畳1室 ④テニスコート全天候
2面 グランド(共同)2面

苗場カントリーロッヂ 0257-89-2615
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①40名 ②和室12畳2室 10畳2室 8畳5室
③大広間 洋室26畳1室 ④テニスコート全天候
2面 グランド(共同)2面

苗場コテージ 0257-89-2517
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①80名 ②和室10畳3室 8畳8室 6畳8室
③大広間 和室16畳1室 30畳1室
④ テニスコート全天候2面 グランド(共同)2面

苗場高原ホテル 0257-89-3222
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国270-4
①90名 ②和室12畳1室 8畳13室
洋室ツイン10室 ダブル2室 トリプル1室
③大広間 洋室60畳1室 30畳1室 ④テニスコ
ート全天候6面 グランド(共同)2面
⑤ ピアノ1台

サンバレータカナ 0257-89-2509
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①50名 ②和室10畳1室 8畳8室 6畳1室
③大広間 洋室42畳1室 ④テニスコート全天候
6面 グランド(共同)2面

ホテル さかえや 0257-89-2331
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①100名 ②和室10畳3室 8畳21室
洋室ツイン2室 ③大広間 和室30畳1室
洋室56畳1室 テニスコート全天候6面
グランド(共同)2面

福田屋旅館 0257-89-2011
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①96名 ②和室10畳8室 8畳6室 7.5畳5室
6畳4室 ③大広間 洋室45畳1室
④テニスコート全天候7面 体育館384平方米
グランド2面 ⑤ピアノ1台

柏屋旅館 0257-89-2501
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①50名 ②和室8畳2室 6畳10室 4.5畳1室
③大広間 和室14畳1室 洋室21畳1室
④テニスコート全天候2面 グランド(共同)2面

東屋ロッヂ 0257-89-2040
新潟県南魚沼郡湯沢町大字三国
①70名 ②和室10畳2室 8畳1室
6畳15室 ③大広間 和室50畳1室
④テニスコート全天候2面 グランド(共同)2面
体育館350平方米 1棟

❖❖❖❖❖❖ 編 集 後 記 ❖❖❖❖❖❖

臨時教育審議会の答申を待つ迄もなく、児童・生徒の健全な発達を願い、能力を最大限に伸ばすことが教師に与えられた責務だと思います。兵庫大会も盛況の内に閉幕、その勢胆気を常務理事の先生方に伝えていただきました。61年度は日本スポーツ教育学会大会との連帯を強めた1年目で研究と実践の融合が今後の学校体育の向上に役立つ試みだと思います。特集として永遠のテーマである学習と評価を取

り上げました。限られたページ数に、多くの内容と欲張った結果、後半を次回にまわしたり、図表を小さくしたり、御執筆の先生方に失礼のあったことをお詫びいたします。62年度から編集担当に長田一臣常務理事(日本体育大学教授)が就任することに決定しました。

(伊藤忠一)